

## 2月21日「荒れ野の中で」マタイ福音書4：1～11

今年も受難節（レント）がやってきました。イースターまでの日曜日を除いた40日間をキリスト教会では節制と悔い改めの時期として大切に守ってきました。この日の最初の水曜日には悔い改めのしるしとして灰を額につけることがならわしとなっています。イギリス国教会ではコロナで接触した灰の式が出来ない今年は、国教会の公式インスタグラムで、特殊フィルターを作って、自分の顔写真を合わせれば灰のしるしがついた写真が撮れるようになっていたそうです（笑）。私も毎年なのですが、コーヒーを辞めて、その分を献金して、コロナで困難の中にある方への支援献金として献げようと考えています。

さて、そんな今日はイエスが悪魔から誘惑を受けるために荒れ野へ行った物語が選ばれていました。40日間の断食の後、空腹を覚えたイエスに悪魔はささやきます。神の子ならこれらの石がパンになるように命じたらどうだ？」イエスはお答えになります。「人はパンだけで生きるものではない。神の口から出る一つ一つの言葉で生きる」誘惑はまだ続きます。悪魔はイエスをエルサレム神殿のてっぺんに連れていき、神の子なら飛び降りても平気だろうとそそのかします。イエスは「あなたの神である主を試してはならない」と跳ね除けられました。最後に悪魔はイエスを高い山のとっぺんに連れていき、世界中の繁栄すべてを見せて言います。「もし、ひれ伏してわたしを拝むなら、これをみんな与えよう」イエスは答えました。「退け、サタン。『あなたの神である主を拝み、／ただ主に仕えよ』と書いてある。」3度の誘惑をイエスはすべて聖書の御言葉によって跳ね返したということです！

私が高校生のときに、当時よくつるんでいた友人からこんなことを言われた。「おれたち友達だよな？」「うん」「俺たち本当に友達だよな？」「うん？」「友達が困っていたら助けてくれるよな・・・」要は、どうしても1万円貸してほしいとのことだった。僕は貸しましたが、後日、彼は返すのを相当渋ったので、私は彼との友情を続けるのを辞めました。友達だから

困っていたら力を貸すのは当たり前だと思います。でも、力を貸して貰える前提で友達だと迫るのは・・・なにかが違いますよね！？それは関係性を利用しているのではないのでしょうか。人間関係であれば、ここまで露骨にする人はそうはいないかもしれない。けれども、神との関係に限ってみるとどうだろうか？私たちは簡単に、神さまを信じているのだから、もっと自分は報われてよいはずだ、神様を信じているのになぜこんな苦難を受けなければならないのか・・・信仰を盾にして簡単に見返りを求めることはないのでしょうか？実際、キリスト教会でも中には神に祈れば病気が治る、祈れば幸せになれる、そういったご利益を説く教会があります。「成功したキリスト者」と信仰と成功を結びつけるのは昔から常套手段です。そんな私たちにイエスの言葉が響きます。「あなたの神である主を試してはならない！」

先日行いました灰の水曜日の礼拝に参加した方から「自分の現実を鋭く見抜かれたように感じた」との感想を頂きました。私も同様の意見で、非常に優れた祈りの言葉であるように思いますので、一部を紹介します。

#### 悔い改めの祈り

聖なる慈しみ深い神様、私たちは、あなたに対して、隣人に対して、そして天と地にあるすべての聖徒たちの教会に対して私たちの罪を告白します。私たちはしてはならないことをし、しなければならぬことをせず、思いと、言葉と、行いによって多くの過ちを犯しました。

私たちが自己中心的な思いに身を任せ、他者を利用しようとしてきたことを告白します。全員) 神様、私たちは告白します。

私たちが自己本位な感情にまかせて腹を立てたことを、また自分よりも幸せそうに見える人をうらやんだことを、全員) 神様、私たちは告白します。

私たちがこの世的なモノと安楽さに執着し、日々の生活と仕事に不誠実であったことを、全員) 神様、私たちは告白します。

私たちが、祈りと礼拝を大切にせず、私たちの内にある信仰について深く思いをいたさなかったことを、全員) 神様、私たちは告白します。

神様、私たちの悔い改めを受け入れてください。私たちを新たにしてください。あなたの  
怒りを私たちから遠ざけてください。

本当に深い人間の罪への洞察と、悔い改めの思いが込められた祈りであるように思います。ここに挙げられている罪にこうありました。「私たちが自己中心的な思いに身を任せ、他者を利用しようとしてきたことを告白します。」今日の物語でもイエスは同じような誘惑を受けるわけです。イエスも空腹の中、神の子なら石ころに命じてパンに変えてしまえばよいだろう。神の子なら、高いところから飛び降りても天使が助けにくるだろう。イエスは聖書の言葉で誘惑に打ち勝つのです。「人はパンだけで生きるものではない!」「あなたの神である主を試してはならない!」イエスは決して神を（引いては他者を）利用しようとする誘惑にはなびかなかったのです。

少し話が変わって、先日、道端で偶然、園児が帰り道で自分で歩かないことをぐずって泣いている、保護者の方が怒っているところに出くわしました。するとこんな風に言われました!「先生の方からもちゃんと歩くように言ってやってください!」ちょっと面喰いました。泣きじゃくる園児にそんなことを言えるはずもなく、もちろん保護者にそんな意図はないのでしょうか、私の「先生」としての立場を、その保護者の方が思う通りに子どもを歩かせるために利用されている気がしました。キリスト教は基本的には「共にいる」共同体を大切にしています。イエスの隣人愛の教えにはそのすべてが集約されているでしょう。しかし、私たちは他者と過ごす時に、利害関係、依存関係、そういったものと全く無縁でいることも難しい。家族でさえも、「これだけ優しくしてるんだから、私にも優しくしてほしい」とか「自分の子どもには老後の面倒を見て欲しい」とか、自分の思うように他者にも動いて欲しいと思ってしまう。職場、地域、学校、色んなところで自分の思う通りに他者を利用したいという欲望と無縁でいることは難しいと思うのです。

そういう意味でイエスが、共に生きる共同体、神の国を伝えるに行く前に

一人きりで荒れ野に行かれたというのはとても興味深いと思います。イエスは他者と共に生きるためにあえて一人になられたのです。そして、弟子たちという時でさえ時には一人きりで祈る時間をとても大切にされたのです。死を待つ人の家を作り、あれほど他者への共感と愛に生きたマザーテレサでも、1日の中で必ず一人で祈る時間を持ったといいます。

「荒れ野」は聖書では本当の神と出会う場所です。それは、他者が一切入り込むことなく、一人きりで自分自身の罪と注がれる神の愛に向き合う場所だからです。学生時代に教会のキャンプで出会ったクリスチャンの学生がこう話していました。家が大嫌いだった彼は家を飛び出して自分一人で生活を始めた。自分でバイトして、自分で家を借りて、自分だけの力で生きようとした。そうして、何もかもを一人でやろうとしたときに分かったのは、いかにこれまで自分が母や周りの人たちに支えられてきたかということだった。私たちは一人きりになって初めて他者を利用しようという者から、他者を愛する者へと変えられるのです。

今、私たちもコロナを通して、他者との繋がりを断たれています。私ももう長い間実家に帰っていません。ある意味で香川に孤立している。だからこそ、どれほど実家や家族に助けられていたかを嘔みしめています。父とはもう1年以上会っていませんが、生まれて初めて父と会えないのを(正確には孫と会わせてやれないのを)寂しいと思った。私たちは今、皆がある意味での「荒れ野」へと、一人になることへと招かれています。この中でどう生きるのか？他者との生き方について問われているのではないのでしょうか。荒れ野の中で一人きりになって初めて「あなたの隣人をあなたと同じように愛しなさい」この言葉が響いてくるのではないのでしょうか・・・